

## 学習院院歌「昔を今と」考

山本章博

昭和二十六年四月、学習院院歌が制定された。当時の学習院長であった安倍能成が作詞を手がけ、そこには戦後の廢墟からの力強い復興の心が歌われている。それは、学内のみならず、日本国民全体に向けてのメッセージでもあった。<sup>①</sup>震災復興の今、この歌は古くて今なお新しい。

一、もゆる火の 火中<sup>ほなか</sup>に死にて また生<sup>あ</sup>るる 不死鳥のごと  
破<sup>や</sup>れさびし 廢墟の上に たちあがれ 新学習院

二、花は咲き 花はうつらふ 過ぎし世の 光榮<sup>はえ</sup>ふみしめて  
まなかひに 世界ををさめ 現実を 生きてし抜かん

三、なげかめや 昔を今と 荒波よ 狂はば狂へ  
黒雲よ ゆく手はとどせ 我が胸は 希望高鳴る

四、二つなく 享<sup>う</sup>けし我命<sup>わがいのち</sup> おのがじし 育て鍛へて  
もろともに 世にぞ捧げん 常照<sup>とこて</sup>らせ 真理と平和

学習院に着任以来、入学式や卒業式などで幾度となく歌い、また古文の授業でも格好の教材として取り上げてきた。しかし、これまでどうしてもただ一点、解釈に苦しむ箇所があった。それは三番の、「昔を今と」という一句である。この解釈について、私見を以下に述べたい。

まず直前の「なげかめや」は、「なげか」が「嘆く」の未然形、「め」は意志の助動詞「む」の已然形、「や」は反語の助詞で、

「嘆こうか、いや嘆くまい」という意となる。「昔を今と」の「昔」は戦前の光榮ある時代、「今」は戦後の廢墟であるから、それを比較しての嘆きであることは動かない。

では、「昔を今と」嘆くまい、つまり「光榮ある昔を廢墟の今と」嘆くまい、というのはどうということなのか。まず、この一句についてのこれまでのいくつかの説明を紹介しよう。

作詞者の安倍能成が学習院初等科の文集に載せた「学習院院歌の解」では、

日本も世界の三大強国だとか五大強国だとか威張った時があった。学習院も校舎も立派で豊かな時もあったが、昔はよかつた、よかつた、と嘆いて居てはいけな<sup>い</sup>。

と解説する。「昔はよかつた、よかつた、と」の箇所が「昔を今と」に対応する。廢墟となった今、昔はよかつたと嘆くまい、ということである。ただこれは小学生向けのかなり砕いた解説であり、「昔はよかつた」という意を表すのに、なぜ「昔を今」という表現になるのか。その点については明らかではない。

また、川島優「学習院院歌とその意味」ではこの箇所を、

今に比べて昔はよかつたなどとなげいてはいけな<sup>い</sup>。

とする。「院歌の解」の「昔はよかつた」という解説に「今に比べて」を加えることによって、歌詞の「今」の意味合いを生かそうとしている。つまり、「昔を今に比べて昔はよかつた」というべきところを「昔を今」と省略したと考える解釈であろう。しかし、「昔を今」が「昔を今に比べて昔はよかつた」という意を含むというのは、直ちに理解され了解されることなのだろうか。あまりにも省略が大きすぎないか。「今」は本来に「今に比べて」ということなのだろうか。

さて、この院歌は、全体に五音七音が繰り返されておられ、あたかも古典和歌の長歌のようだ。また歌詞の中にも古典和歌を踏まえた箇所がある。一番冒頭の「もゆる火の 火中に死にて」は、『古事記』に見える弟橘比売命が倭建命に向けて詠んだ、

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも (二四)

から取ったことは、先の「学習院院歌の解」でも触れられている。また二番の冒頭の「花は咲き花はうつろふ」という花の移ろいの哀感も、和歌の常套表現である。

このように院歌は、形式そしてその歌詞を含めて、全体に古典和歌の雰囲気を存分にたたえている。そこで、「昔を今と」という句の用例を古典和歌の中に求めてみた。

まず目にとまったのは、式子内親王の、

かへりこぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕にほふ橘（新古今集・夏・二四〇）

という一首である。戻って来ない昔を今と思つて寝た夢から覚めた枕には、昔を思い出させる橘の香りが漂っていた、という意味だが、ここでも依然として「昔を今と思ふ」というのはどういふことなのか直ちには判然としない。この歌の「橘」は、『伊勢物語』六〇段の、

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（一〇八）

を踏まえていることは明らかだが、この「昔を今と」も諸注釈書がすでに指摘しているように、同じく『伊勢物語』三二一段、

むかし、ものいひける女に、年ごろありて、

いにしへのしづのをだまき繰りかへし昔を今になすよしもがな（六四）

といへりけれど、なにも思はずやありけむ。

を踏まえることで初めて理解されるものである。この三二一段は、昔深い関係を持った女に、数年経つてから、「倭文織りの糸巻きをくるくる巻くように、昔を今に引き戻す方法はないものか」と男が詠んだが、女からは何の返事もなかった、という話である。この「いにしへの」の一首を踏まえることによって、式子内親王歌の「昔を今と」は、「昔を今になすよしもがな」という意を含むことになる。つまり「昔を今と」は「昔を今に戻す方法が欲しい」という意になるのである。

この『伊勢物語』の一首は、源義経の妾、静御前が、

しづやしづしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな

と初句を変えて歌ったことでも知られる。この歌を頼朝の前で歌ったことにより、頼朝を激怒させた。静御前がここに、義経の時代に戻したいという願いを込めたからである。

このようにこの歌は、時代を越えて歌われ、これを踏まえた歌も多く作られていく。「昔を今と」の用例は、この式子内親王歌以降にも、

過ぎにける昔を今と思ふ間に今日のきのふとなりぬべきかな（為家集・二二〇〇）

時しあればしづのをだまきくるる夜に昔を今と句ふ橘（新続古集・夏・二八〇・雅永朝臣）

さぞなげに昔を今と偲ぶらん伏見の里の秋のあはれに（とはすがたり・巻五・一六一）

われもげに昔を今とおもひいでてねよにみつる夢ぞはかなき（親清五女集・一〇一）

いかがしる昔を今と見る夢のたえて人なき床の秋かぜ（草根集・一〇四二九）

などというように見出すことができる。こうして、凋落した今を嘆く心を代弁してくれるものとして、

いにしへのしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな

の一首は長く生きていた。この院歌もその伝統の上に立つ歌として考えたい。

結論、院歌の「嘆かめや 昔を今と」とは、「二度と戻らぬ光栄ある昔を今に戻したいよ、などと嘆くまい。」という意味である。古来和歌で詠み継がれてきたように、花が咲き萎むのは自然の道理。しかしそれを受け入れて生き抜いていくしかない、と

いうのが二番。同じく古来、昔を今に戻したいと思ひ嘆くのは人情の道理。しかし、今はそれを乗り越えなければならぬ時代だと歌うのが三番である。自然として人の心の道理を哀切に歌い、諦観するのではなく、それをも越えようと歌うところに、歴史を踏まえて新しい時代を切り開く力強さを感じるのである。

「昔を今と」と聞けば直ちに『伊勢物語』の一節を思い起こすことができる、そういう時代があった。戦後まもなくは、まだそういう時代だったのだろうか。今これを歌う我々は、こうした素養を完全に失ってしまったのだが、しかし、それを捨てられずに歌い続けている。「君が代」しかり。今も我々は古典和歌の中を知らず知らずのうちに生きていて、それを歌いながら心をついにしようとしている。意味が分からなくても、何かそれを歌うことによって、歴史と連なると同時に、今を生きる者同士が繋がっているような気がしてくる。これが古典和歌の力なのだ。

## 〔引用〕

「学習院院歌」―学習院大学「学生生活の手引」二〇二二年度版。「古事記」―小学館新編日本古典文学全集。「伊勢物語」―新潮日本古典集成。「義経記」―岩波日本古典文学大系。その他の和歌―新編国歌大観。読みやすさを考慮し、一部表記を改めた。

## 〔注〕

- (1) 安倍能成「学習院院歌の解」(学習院初等科学校文集「小ざくら」三四号・昭和二六年二月)。(参考資料)に全文を掲載する。
- (2) 注(1)に同じ。
- (3) 「学習院初等科のあゆみ」(平成二三年一月、学習院初等科社会科研究部)。
- (4) 『義経記』巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」。「吾妻鏡」文治二年四月八日条にも見える。

〔参考資料〕安倍能成「学習院院歌の解」(学習院初等科学校文集「小ざくら」三四号・昭和二六年二月)。旧字体は改めた。

私は今年の、皇太子様の御誕生日と同じ日の十二月二十三日で、ちょうど満六十八才になる。殿下より精確に五十才上である。私はこれまでに文章は大分書き、和歌も俳句も少しは作ったが、こんな院歌のようなものを作ったのは、生まれて始めてである。詞はまずいけれども、私はこの院歌を、日本国民全体にもうたってもらいたいくらいの意気込みで、作ったのである。

一 西洋の神話に、フェニックスという鳥があつて、五百年ごとに、もえる火の中で焼け死んで、又生きかえるという。不死鳥というのはその鳥のことで、世界は絶えず生き返り死に返り変つてゆくが、その中に死なぬ生命があるという意味である。「もゆる火の火中」という文句は、「古事記」という古い本にある

弟橘姫の御歌から拝借したので、委しいことは先生にきいてもらいたい。戦争で学習院は焼け、敗戦後皇室の御保護を離れて私立学校になったが、その焼跡の上に、先生と生徒と力を合せて、新しい学習院を作りあげてゆこう。

二 花は、咲くが又色があせて萎むものである。学習院もこの盛衰はのがれにくい。ただ長い歴史の間に養って来た名誉ある学風と精神とを基にして、わるいことはどしどし改め、広く世界のことを眼の中に入れて、狭く独りよがりにならず、現実（世の中）の醜さや苦しさに負けないで生きぬいてゆこう。

三 日本も世界の三大強国だとか五大強国だとか威張った時があった。学習院も校舎も立派で豊かな時もあったが、昔はよかった、よかった、と嘆いて居てはいけない。荒浪が狂つても、黒雲がゆくさきを閉しても、みんなの胸に希望のラッパを高く鳴らして、屈せず進め。

四 人はみんな外の人でない命、即ち個性を天から与えられて居り、全く取り柄のない人間はない。頭がわるい、身体が弱いといって失望せずに、自分の個性を育て鍛えて、めいめい自分の力を養い、さてこの力をみんなして世の為、社会の為に捧げよう。まことと平和とを永久の光り導きと仰いで。

解らぬことは先生方にきいてもらいたい。

（昭和二十六年十一月十八日）